研究課題	特別支援学校における効果的な授業支援の在り方研究
副題	～オンデマンド・オンライン等を生かした助言～
キーワード	特別支援教育、支援者支援ミーティング、オンライン、オンデマンド
学校/団体 名	公立広島県教育委員会　特別支援教育推進授業支援研究グループ
所在地	〒730-8514　広島県広島市中区基町 9-42
ホームページ	https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/

１．研究の背景

特別支援学校では児童生徒の在籍数が増加しており、それに伴い指導する教員も増加している。児童生徒の障害の状態は多様化しており、個々に応じた指導を各担任等が的確に計画・実施していく必要がある。教員構成は、退職を迎えるベテラン層の教員が多い一方で、経験年数が浅い若手教員の割合が増加しており、校内で授業等について的確にアドバイスできる者が少なくなっている。しかしながら教員には、経験年数に限らず一定の授業力が求められる。加えて、各学校では業務改善を積極的に図っていく必要もあり、授業や教育課程について、時間をかけて検討するだけでなく、効率的・効果的に検討する手法が求められている。

こうした特別支援学校を指導助言する立場にある指導主事もまた、教員や指導主事としての経験年数に関係なく一定の指導助言力が求められる。本県では、採用 10 年前後から指導主事になるケースもあり、指導主事の研鑽や力量アップ、また、指導主事の業務改善についても改善を図っていく必要がある。これらは市町立学校及び市町教育委員会も同様である。

各特別支援学校では授業研究、教育課程検討などが行われており、指導主事が学校訪問して授業参観を踏まえて指導助言を行う場合もあるが、学習指導案をもとにした助言を年１回程度しても成果は見えにくい。こうした状況を鑑みると、支援者支援の視点から、授業者が相談したいことを事前に把握するとともに、オンラインやオンデマンド等ツールを活用して複数の指導主事の意見を求め、それらを生かした指導助言を行うことで、授業研究や分掌業務にかかる教員の負担、学校訪問する指導主事の負担を軽減できるのではないかと考える。

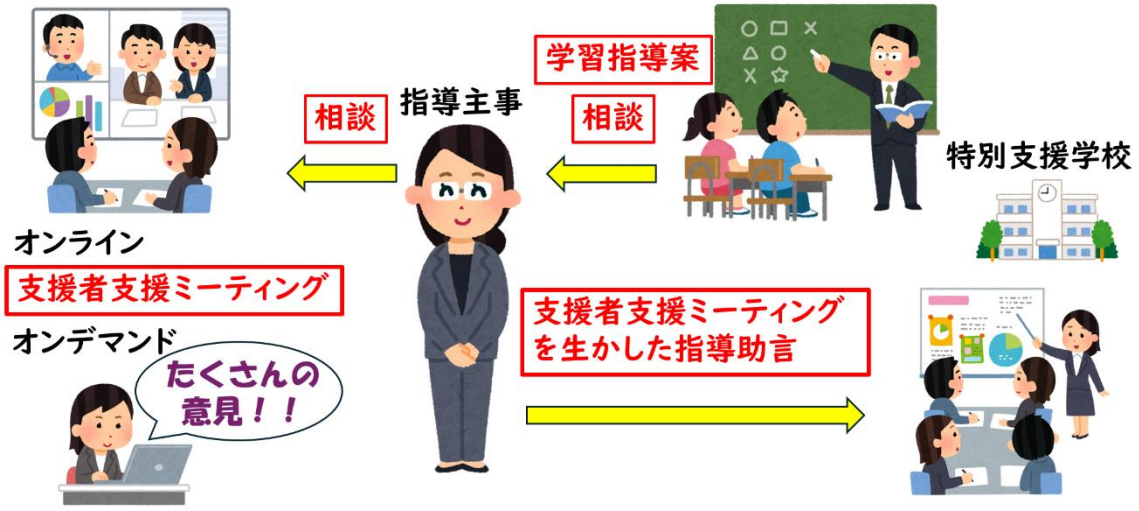

図１　オンライン・オンデマンド支援者支援ミーティングを生かした指導助言イメージ

２．研究の目的

研究の背景を踏まえ、本研究では、教員等の相談内容をもとに複数の指導主事が意見を出し合って、助言ポイントをピックアップする取組「支援者支援ミーティング」を中心に研究する。特に指導助言する内容を検討する手法、時間、伝え方、効果を検証したい。

図２　オンライン支援者支援ミーティングに向けた打ち合わせの様子

３．研究の経過

研究の経過は以下のとおりである。なおオンデマンドによる支援者支援は主にメールを使用した。指導助言を行う指導主事が学校から届いた学習指導案と授業者の相談ニーズ、また指導主事自身がほしいアドバイスを記載してメールにし、メールを受けた者が期限内に返信を重ねた。

表１　研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
４～９月	研究デザインにかかるミーティング（５回）	
５月	オンライン支援者支援ミーティング① （特別支援学校センター的機能にかかる支援）	アンケート調査、議論記録
６～２月	オンデマンド支援者支援ミーティング（23 回）	メール等記録
９月	効果的な支援者支援の在り方に関する研修 （大学 准教授）	
10 月	支援者支援に生かすための県外取組視察	
12 月	研究デザインにかかるミーティング（１回）	
１月	オンライン支援者支援ミーティング② （県立教育センターの学校支援にかかる支援） 	アンケート調査、議論記録 図３　オンライン支援者支援ミーティングの様子
	効果的な支援者支援の在り方に関する研修 （研究機関 総括研究員）	
２月	研究まとめにかかるミーティング等	

４．代表的な実践

（１）オンライン支援者支援ミーティングの実施

オンライン支援者支援ミーティングは図４の手続きにより実施した。短時間で効率的に議論を深めることができること、手法が他の校種や学校等でも参考にしやすいこと等を鑑みて検討した。研究計画では 30 分での実施を計画していたが、検討する中で、内容を深めることもでき、気軽に実施できること等を考慮し 60 分とした。

オンライン支援者支援ミーティング（60 分）
① 自己紹介、目的・時間の確認（５分）
② 相談者から相談したい内容の提供（10 分）
③ 質疑、相談内容の絞り込み（15 分）
④ 意見交換、アイデア出し（10 分）
⑤ 相談者から（実践したいこと等）（５分）
⑥ 振り返り（５分）

図４　オンライン支援者支援ミーティングの流れ

ポイントが大きく２つある。１つ目は、ファシリテーター（司会）が、①において時間配分と図５のセリフを伝え、参加者全員が運営を意識しながらミーティングを進めること、２つ目は、図６のように、ノートアプリなどを活用し議論を見えるようにすることである。このようにすることで参加者が時間やゴール、また相談者の立場に立った議論がしやすくなった。

本日のミーティングの目的は２つです。相談者が「相談してよかった」と思える会にすること、参加者が「参加してよかった」と思える会にすることです。時間は 60 分間です。
① はじめに、簡単に自己紹介をしていただきます。
② 次に、相談者から本日相談したいことについて具体的にお話しいただきます。
③ その後、参加者が自由に質問をしながら、相談者の相談内容の絞り込みを行います。
④ そして、相談内容に対する意見交換やアイデア出しを行います。ここでは、できるだけたくさん出すということがポイントです。
⑤ その後、相談者から、ミーティングの内容を踏まえ、意識して取り組みたいことについてお話しいただきます。
⑥ 最後に、一人一言、感想を共有します。

図５　オンライン支援者支援ミーティングでのファシリテーターの①でのセリフ（抜粋）

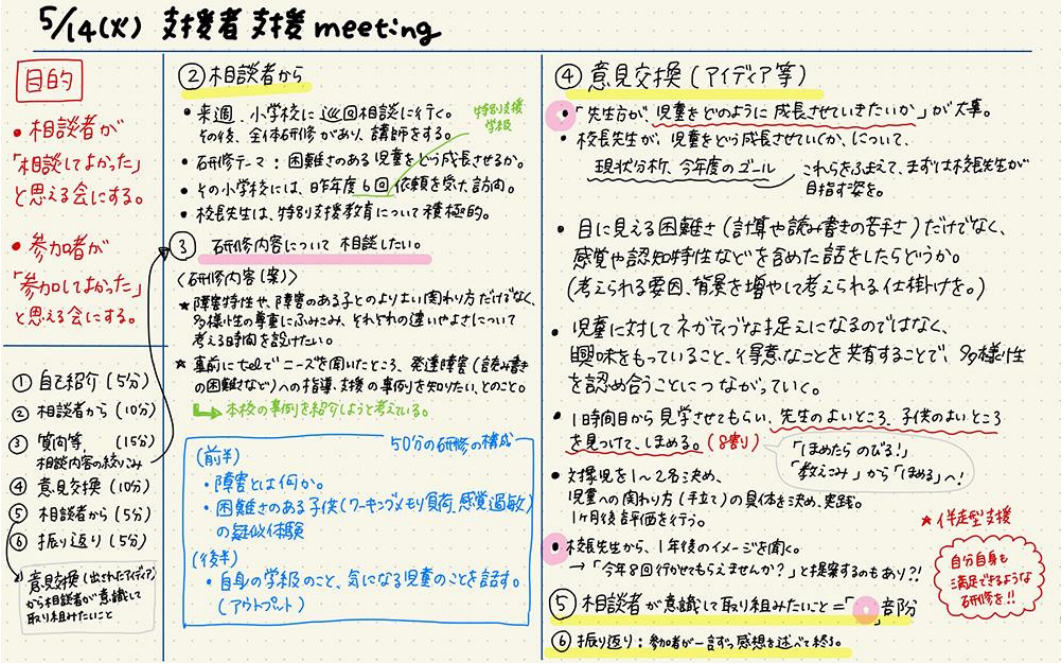

図６　オンライン支援者支援ミーティングの記録

５月に実施した図６のミーティングでは、小学校での校内研修会の内容について、特別支援学校でセンター的機能を担う先生からの相談を受けて、指導主事等 10 名が参加して意見を出し合った。後日、相談者から「助言をいただいたことで研修のねらいが明確になりました。また、次回以降の巡回相談につなげることができました。」という嬉しい報告があった。

また、１月に実施した、特別支援学校の教育研究をサポートする県立教育センター指導主事からの相談を受け、指導主事７名が参加した支援者支援ミーティングでは、次年度以降の教育研究をより良いものにしていくために、教育研究部員に対してどのような話をしたら良いか、意見を出し合いながら視点を明確にすることができた。後日、相談者から、「支援者支援ミーティングはとても参考になった。今年度の成果を教育研究部員から引き出すことを特に意識した。『今日の会は楽しかった』という声があり嬉しかった。」という報告があった。

（２）オンデマンド支援者支援ミーティングの実施

オンデマンド支援者支援ミーティングでは、主にメールを使用し、指導主事である相談者が、学校から届いた学習指導案と授業者の相談ニーズ、また指導主事自身がほしいアドバイスを記載してメールにし、メールを受けた者が期限内に返信を重ねた。

本研究では計 23 回実施した。表２は、特別支援学校での校内授業研での指導助言前に行ったオンデマンド支援者支援ミーティングの一部抜粋である。相談した指導主事は、アドバイスを踏まえ、より多角的かつ焦点を絞った助言を行うことができたとともに、指導助言を受ける授業者や当該校の教員にとっても、一層今後に生かすことができる指導助言となったと考えられる。

表２　オンデマンド支援者支援ミーティングの記録概要（一部抜粋）

依頼概要	アドバイス概要	アドバイスを受け反映したこと等
授業と研究をどう関連づけて伝えるか。	○卒後の姿、学部や本時の目標達成など、**議論のピントを変えて示したらどうか。** ○**研究計画のゴール設定を明確に**するよう議論を促すのはどうか。 ○本日の**授業がつながる先**を授業者に語るように促すとよい。	本時の授業の良かった点をたくさん価値付けしたうえで、単元構成の工夫と地域協働の工夫を一緒に考え、それが指導案に表れるような様式にしていきましょう、とまとめた。
教科別の指導で大切にすべきことは。	○**他教科や各教科等を合わせた指導と関連付けて指導すること**によって目標を達成するということを伝えてはどうか。 ○授業で**☆本を活用していることについてしっかり価値付けていこう。**	学校教育目標と国語科の目標を結び付けて説明したことで、「国語科で何をねらうのか、そのために何をしたらいいのかが明確になった。」という言葉を聞くことができた。
この指導案の良さは何か。	○**単元設定のよさ**（農業高との連携⇒生徒のやる気ＵＰ等）の価値付けをする。 ○**ここまでどんな議論をしてきたかを助言の途中で授業者に質問する**とよい。	単元設定の良さについて学習指導要領を踏まえながら価値付けた。また、授業者への問いかけ等を通じて、単元・授業づくりやグループ研究の過程を把握したうえで、気付きを伝えるようにした。

図７は、オンデマンド支援者支援ミーティングを受けて指導助言している様子である。気付きを一方的に伝えるのではなく、受講者一人一人が当事者意識をもち、思考しながら「自分だったらこうするかな」など自問自答できるよう、ポイントを絞って投げかけるとともに、指導助言の時間の中でも授業者や受講者と対話をしたり、受講者同士も意見交換できる場面を組み込んだりする工夫を共有した。

図７　指導助言の様子

５．研究の成果

４．代表的な実践で示したとおり、オンライン・オンデマンド支援者支援ミーティングの手法・時間・伝え方・効果等を検証できたことが研究成果の１つである。また手法等だけでなく、本研究を担当する指導主事が、研究の打ち合わせ、オンラインやオンデマンド（メール）のミーティングを通じて、ざっくばらんに思いを言い合うことができたことで、結果的に、学校への指導助言の質を高めることができたと考える。

さらに、支援者支援ミーティングに焦点化した研究に取り組んだが、研究過程において、学校で研究を担当する教員から、「研究の目的が先生方に浸透せず、先生方にやらされ感がある」、「研究部や授業者など一部の負担が大きい」、「一時的なものになって日々の実践に生かされない」、「学校全体で研究を進めていくにはどうしたらよいだろうか」等の声を聞くことがあった。こうした声に対応することについても協議を繰り返し、支援者支援ミーティングや実際に研究授業において指導助言を行うためには、図８に示した、事前の学校との連携が重要であり、本研究でも取り組み、事前連携の効果を感じている。このことも研究の成果といえる。

① 校長の学校経営方針等の確認
② 研究部の考え等の把握
③ 授業者が授業で引き出したい姿の聞き取り
④ 担当指導主事として伝えたい事項の整理
⑤ ①～④を踏まえた支援者支援ミーティング
⑥ 研究授業直前・直後の授業者、研究部連携
⑦ 全員参加型の指導助言

図８　指導助言に必要な事前連携事項（素案）

通常、一度きりの授業研究では、指導助言を担当する指導主事は、事前に送られてきた学習指導案に目を通し、助言ポイントを考え授業に臨む。その後、指導助言する際には、事前のポイントとメモをもとに取組の価値付けをしたり、更に研究を深める視点を示したりする。しかし、これだけではなかなか指導助言の効果が見えにくい。こうした状況に対して、学校の教育研究力を高めるために、また、研究授業を担当する者が安心して思う存分に挑戦することができるようにするためには、経験年数の浅い教員の割合が多くなっている学校において、指導主事が積極的に学校研究や研究授業の指導助言に関与していくことが一層求められる。図８に示した、指導助言に必要な事前連携事項（素案）は次のとおりである。

① 校長の学校経営方針等の確認

研究授業で指導助言を行うためには、まずもって、学校経営や人材育成を担う校長が、研究授業を通して教職員にどのような力をつけてほしいと願っているのか、事前にしっかり聞き取りをしておくことが重要である。

② 研究部の考え等の把握

次に、校長の考え方を踏まえたうえで、研究部と事前に話をする必要がある。指導主事は、研究部から事前に、難しければ研究会当日に、研究テーマに込めた想いや、どうまとめていきたいのか等について丁寧に話を伺い、それを肯定し実現できるような研究協議の持ち方を提案し、指導助言の内容を再度検討する。

③ 授業者が授業で引き出したい姿の聞き取り

また、授業者からも事前に話を聞いておくことも重要である。授業者は学習指導案には表現しきれていなくとも、児童生徒につけたい力や資質・能力について思いを強くもっていることがほとんどである。授業者が、どのような子供の姿を引き出したくて授業を計画したのかしっかり引き出すことも指導主事の役目である。

④ 担当指導主事として伝えたい事項の整理

事前に届いた学習指導案検討においては、内容を踏まえて、学習指導要領が目指す方向、県が目指す方向、対象の児童生徒の障害特性、授業理論を踏まえた専門的な指導内容や方法など、できる限り情報収集し、先の校長の方針、研究部の想い、授業者の願い、そして担当指導主事の期待も込めて、伝えたいポイントを事前に整理したうえで当日に臨みたいところである。

⑤ ①～④を踏まえた支援者支援ミーティング

そして、このタイミングで支援者支援ミーティングを行うことが効果的と考える。

⑥ 研究授業直前・直後の授業者、研究部連携

研究授業当日も、授業前に校長、研究部、授業者から改めて思いを聞いておくことが大切である。研究部とは、できれば事前に、研究協議でどのような意見が出るとよいか思いを聞き、そのための問いかけを一緒に検討できるとよい。可能なら短時間でもグループ協議を加え、問いかけに対し協議参加者全員が発言できる機会をもてると研修効果も高い。また、研究授業後、研究協議を行うまでの間には、授業者に、授業者からみて今日の授業はどうだったか話を聞くとともに、研究協議の冒頭に行われる「授業者からの振り返り」で授業者から振り返ってほしいポイントについて打ち合わせを行っておきたい。

⑦ 全員参加型の指導助言

これらを経て指導主事は、事前に準備したポイントや授業参観での様子、研究協議で出された意見を踏まえつつ指導助言で伝えることを再構成し、項目を絞って効果的に伝え、最後に、今後も学部全体で議論してほしいことなど、開いた形で話を終えるようにする。できれば短時間のグループで意見交換することを組み込むなど、参加者全員が参加した実感をもてることが大切である。また研究協議後は、改めて授業者、研究担当者に、今後も意欲的に取り組むことを期待する声をかけるとともに、校長に対して、職員に伝えたことや、指導主事が考える今後の方向性など伝えるようにするとよい。

本研究では研究授業にかかる指導助言に絞った支援者支援ミーティングを取り上げたが、指導助言を行うためには、上記のような取り組みを合わせて行うことで、はじめて依頼に一層応じた指導助言を行うことができる。これらは、指導主事一人で完結すべきことではなく、チームで共有し、様々な意見をチームから求めることで、担当者にはない視点も加え、より精度の高い学校支援につながる。そして、担当者の負担も軽減されるうえ、担当者の経験値に左右されることも軽減される。そのため、本研究のように、常にチーム支援ができる体制が不可欠であり、学校と丁寧に対話し、チーム内でも活発に意見を交わし、チームに属するメンバーそれぞれが学び続け、それぞれの強みを生かしていくことができるチームアプローチが必要である。

６．今後の課題・展望

オンライン支援者支援ミーティングにより複数の指導主事の意見を踏まえること、効果的な指導助言について大学教授らと協議したり視察したりしたことを踏まえた指導助言を行ったことなどにより、効果的な指導助言を行うことができた。参観した授業の写真や動画を直後の指導助言に即時に取り込むことで具体的な助言とすることもできた。一方で、コンパクトに取り組みたかった指導助言の検討に想定以上に時間を要した。また、学校全体の授業改善への効果検証も十分できていない。何より、よりよい授業づくりを推進するには、各学校の研究全体を支援していく必要性も課題として挙がった。このため、指導助言の検討方法に加えて、学校への指導助言の時期、回数、内容、伝え方、フォローアップ等、多くの課題について引き続き研究を深めていく必要性を強く感じている。令和６年 12 月 25 日、中央教育審議会に諮問された「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」においても、「指導主事等の資質・能力の向上の在り方」の検討が示されたところであり、本研究が担う役割の大きさを感じている。

また、生成ＡＩによる事前検討や、参観授業動画を指導助言に即時的に組み込むなど、一層ＩＣＴを活用した支援方法について、教員及び指導主事の業務改善に寄与したか、ＩＣＴを活用しない場合と比較検討したり、成果について支援者、会議参加者、学校、授業者等のアンケート及び聞き取りのクロス集計により検証を行ったりして、授業づくりや業務改善への効果を導き出す必要もある。

７．おわりに

本研究が目指す支援者支援による効果的な指導助言等の在り方は、授業への効果が出やすく、また、学校の教員と指導主事の双方のＯＪＴの人材育成ともいえる。また、本研究で携わる支援者が効果的、意欲的に指導助言を行うことができ、その結果、児童生徒の一層の主体的な学びにつながるとともに、業務改善が図られた教員が授業により専念できること等を引き続き目指していきたい。

８．参考文献

・文部科学省（2024）「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（６文科初第１８５５号）、令和６年 12 月 25 日、中央教育審議会　等